新しい薬学をめざして 38, 79-80 (2009).

SSRI 問題の「中核」に横たわるもの

石田　悟

Medicalization による「入り口」（診断）の混乱

自殺者が 3 万人を始めて超えた 1998 年の翌年，欧米に 10 年以上遅れて最初の選択的セロトニン再取り込み阻害薬（SSRI）であるフルボキサミンが日本で市場化され，ついでパロキセチン，サートラリンとつづき現在に至っています。

SSRI を販売する各製薬会社のマーケッティング部はその販売にあたり，1960 年代に提出され，今では「(根拠がないとして否定されつつある) Depression のセロトニン仮説」と（これもまったく根拠のない）SSRI の「絶対安全神話」を全面に，患者の掘り起こしに向け，一部精神医学者を巻き込んだ産・学・官共同路線をしきつつ，「Depression は心の風邪引き」，「Depression は働きながら，そして薬を飲みながら治す時代」など，Depression が持つ生体の危機に対する防衛的側面（対処・対応行動としての積極的側面）をまったく無視したビジネス文書を医療機関のみならずコマーシャルベースで大量に流布させてきました。また，操作的診断（DSM）の表面だけを取り入れた「診断―投薬（SSRI）誘導用簡易問診票」(以下，問診票）を医療現場の中に定着させるなど，市場の地ならし化（Medicalization）に奔走してきました。

Depression の診断に際しては，DSM だけでなく発達論的視点や反響喪失性，感情喪失性といった，いわゆる“つかみの部分（直観診断)”が非常に重要になるわけですが，それらをまったく反映していない「問診票」による方式では，Depression のみならず抑うつ状態を示すあらゆる疾患（人格障害圏や不安障害圏，そして双極性障害圏）が“投薬対象”となってしまい，本来第一選択薬剤として気分安定化薬や神経遮断薬の少量で治療すべきところを一律に SSRI

が投薬され，結果として米国の精神医学者・アキスカルが述べているように「荒れた状態」に患者が置かれている可能性が高いのでは，と考えています。

精神科医・笠原嘉はかつて，「Depression の治療は，その入り口において密だが，出口において疎である」としていますが，SSRI 販売製薬企業によるこの間の凄まじいまでの Medicalization は，「Depression の入り口すらも疎にし，回復という出口すらも見えにくくした」と言えるのではないでしょうか。

日本における承認適応症上の「問題」

SSRI が臨床試験で国際的に有効性が確認された本来の適応は，「大うつ病障害の診断基準に合致した重度のうつ病と強迫性障害およびパニック障害などの重度の不安障害」ですが，欧米に 10 年遅れて市場化された日本では，①うつ状態にまでその「承認適応」範囲を拡げるとともに，②診断基準に合致および重度の判断を求めていない点など，「日本的曖昧さ」をその特徴としています。

「不安と抑うつ」とは分離し難く，しかもあらゆる疾患の基底に流れている「症状群」であることを考えますと，SSRI を販売する製薬企業は「限りない市場化の可能性」を日本で手にし，厚生労働省は彼らに“お墨付き”を与えたということになります。このことは本来，療養・生活労働環境を微調整するだけで「回復」過程を歩むことのできる患者や，精神療法やリハビリテーションの対象であるべき人たちを含め「SSRI 漬け化（濫用使用）」されている可能性があり，その意味では SSRI による有効領域や有害反応を含め 10 年以上のタイムラグがあったにもかかわらず，批判的に吟味し，そして科学的に評価することなく（学ぶことなく），（おそらくはメーカーの言い分に添った形で）現行の適応症を承認してきた厚生労働省の責任は大きいと考えます。

SSRI はまた（市場化に際して），一部精神医学者の強い“後おし”のもと，「最も安全で，そして一般科でも安心して使用できる抗うつ薬」として紹介されてきた経緯があります。しかし，「事実」は最も安全で安心できるどころか，「常用量範囲における胎児毒性や昨年明らかになった生殖毒性，高頻度に発現する性機能障害，従来型抗うつ薬には認められない骨折や骨密度の減少，夢遊病状態や感情不関状態の形成，自傷他害を含む衝動性亢進」など，薬としての“適格性”が問われる内容が多く，SSRI が現場にもたらした課題として，私は，「評価」に向けた活動の積み上げをはかるとともに，治療内容すべてにわたり患者が関与する“Concordance”の概念を土台に，徹底した Informed Consent & Choice（情報公開に基づく説明の上での同意，そして患者による薬物治療を含めた選択）の構造化の必要性と緊急性が求められているでは，と考えます。

（いしだ・さとる　弘前市・藤代健生病院薬局）